

# 仏教学の基本構造

## 宮 本 正 尊

### 一 仏教学の萌芽、求善・求法と研学

- ① 仏伝の聖求と大般涅槃經の求善・求法、法華經と十地經の求法
- ② 七仏通戒偈の衆善奉行・自淨其意
- ③ 戒・定・慧の三學

① 聖求 *ariya-pariyesana* と求善 *kip-kusala-anuyesi*  
聖求とは、生老病死に過患を見て、無生・無上にして安穩なる涅槃を身につけられた釈尊仏陀の宗教的求道のことであつて、アリヤンの「古きよき伝統」の体得が語られる。そしてそこには、聖求と非聖求 *anariya-pariyesana* とが対照的に示されている。

聖求経も仏伝の一つであるが、とくに仏陀の晩年を委細に説いている『大般涅槃經』*Mahāparinibbānasuttanta* (D. N. 16, p. 151) にも、阿難に看取れて臨終の病床にあられる釈尊に一句の法門を要求したスバツダ *Subhadda* と対して、懇ろに仏道修行に励まれた生涯の経歴を語つてられるうちに「求善」の言葉が見出される。

スバツダ *Subhadda*、自分は二十九の歳に善を求め *kip-kusalanuyesi*

仏教学の基本構造(宮 本)

出家した。スバツダよ、自分は出家してから、五十余年となつた真理と法の境地をのみ歩んで来た。 *āyassa dhammassa padesavati*。それを外にしては、修行者 *samaṇa* なるものもなからず。最後の直弟子 *pacchimo sakki sāvako* と云われるスバツダに、善を求め、初めてカピラ城 *Kapilavatthu* を出されることが、臨終の教誡になつてゐるわけである。

「求法」について *pariyesi* は法華經に “*buddhadharma-paryesiya dhyāyi ca bhavet*” として一回、十地經には *buddhadharmaparyesihetoh* として一回使用される。また *pariyesana* は十地經に “*saddharma-paryesana-abhiyukto viharati*” と “*buddhadharma-paryesna-abhiyukto nāsi*” として一回使用される。

H. Kern and Bunyiu Nanjio: *Saddharma-puṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica X, Puṇya-paryāya-parivartō XVI, p. 340. St.-petersbourg, 1908.

U. Wogihara and C. Tsuchida: *Saddharma-puṇḍarīka*, Romanized and revised text of the Bibliotheca Buddhica publica-

仏教学の基本構造(宮本)

tion, Puṇya-paryāya-parivartō XVI, p. 288, Tokyo, 1935.

J. Ralder: *Dasāhāṃika et Bodhisattvabhūmi*, p. 32. Société Belge d'Études Orientales, Paris, Paul Geuthner, 1926.

南条文雄・泉芳環梵漢 新訳法華經、分別功德品第十六、真宗大谷大学出版部、法蔵館、大正二年九月、三八〇頁。鳩摩羅什訳妙法蓮華經卷第五分別功德品第十七、大正九、四五頁下。闍那崛多共衆多訳添品妙法蓮華經卷第五分別功德品第十六、大正九、一八〇頁上。竺法護訳漸備一切智德經卷第二、興光住品第三大正十、四六九頁上。

Franklin Edgerton: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. II, *parjyestī*, p. 336, Yale Univ. press, 1953.

② 衆善奉行・自淨其意

諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸仏教

この偈は、古来、仏教の眞実をよく一偈に摂め尽したものとせられ、七仏通戒偈といわれている。増一阿含卷第一、序品第一(大正二、五五二上)にある通りである。しかし増一の卷第四十四、不善品第四十八(大正二、七八七上)では、迦葉仏の偈とせられ「一切惡莫作、当奉行其善、自淨其志意、是則諸仏教」と訳出されている。

パーリ法句經Dhāmaṃpāda, XIV, Buddhavaggo No. 183.

Sabbapāpassa akaraṇaṃ, *kaṣaṭassa upasampada*,

Sacittariyodappanāṃ, eṭam Buddha sāsanam.

釈尊仏陀が善を求めて出家し、生涯その実践に努力された

ことが、一目瞭然たるものがある。そしてその自淨其意の「淨」は、空の三原則、ありのままに見る・逆さまに見ない・純粹清淨である(Yathābhūcā avipallathā parisuddhā) などの清浄性にならなければならない(M. N. 121 Cūḷasunnāta-sutta, vol. III, p. 109)。なお筆者「空思想及びその発達—阿含における空住經典の訳並に研究—」(日本仏教学会年報第十七号、一〇七頁、昭和26年6月)参照。

③ 戒・定・慧の三学

この戒定慧の三学 *tiṣṣo sikkhā, trini sikkhāni* は、増上戒学・増上心学・増上慧学とも呼ばれる。人間の智情意にわたり、われわれの身心学道を理論と実践にわたり研究して基底付ける学の要目である。大小乗を通じて、仏教学構造の基本線として最も重要なものといえる。「善を求め、法を求め *pariyesana, amesi*」と云ふに、この三学の「学 *sikkhā, sikkhā*」は、学びかつ研究することであつて、仏教学の学的活動の萌芽でもあるが、進んでは学の本質そのものを形成する。阿毘達磨俱舍論卷第二十四、分別賢聖品第六の三には、次のように説いている。

学、要有三一、増上戒(学)、二、増上心(学)、三、増上慧(学)。  
以二戒定慧、為三自体。

恩師ヘルギーのフサン先生フランス訳を次に掲げる。

‘Les trois sikkhās, ou disciplines, pratiques, adhiṣṭham, adhiṣṭi-

tam, adhiprajñam, qui constituent le chemin, et le fruit des trois sīkṣās.” (Louis de la Vallée Poussin: *L'Abhidharmakośa de Vasubandhu*, Chap. VI, Hizen-Isang XXIV p. 225: Paris, Paul Geuther, 1924)

仏陀のさとり体験である八正道中道も、正見・正思(増上慧学)正語・正業・正命(増上戒学)正念・正定(増上心学)として三学にまとめられ、しかも「正精進」こそは、<sup>ほんしやうが</sup>「Jataka 本生話の菩薩がつねに忍辱精進によつて、その菩薩利他行を完遂したように、八正道もそのうちにある精進力によつて、菩提のさとりとなりうるのである。そのように、戒定慧の三学の学道も、その根に精進力があつてこそのものであることを忘れてはならない。

## 二 大乘菩薩の行学

① 八千頌般若の菩薩「云何修学」

② 入法界品善財童子「云何学菩薩行」

③ 般若菩薩「云何修学」

この「大乘菩薩の行学」の章は、昭和八年に発表した「根本分別の研究」<sup>常盤博士</sup>『仏教論叢』(弘文堂)第二節「仏教学と根本仏教」と第八節「菩提分法の増広加上と菩薩菩提分法」において論証したものである。「根本分別の研究」は次の十節から成る。

① 仏教研究の根本問題 ② 仏教学と根本仏教 ③ 覚及覚支

仏教学の基本構造(宮 本)

の研究と智の立場 ④ 識・智・覚証の弁証法的開展と仏教学 ⑤ 心・識・分別と根本行地及び根本心地 ⑥ 識・唯識及び分別と根本分別 ⑦ 根本分別と根本中 ⑧ 菩提分法の増広加上と菩薩菩提分法 ⑨ 自覚と弁証法 ⑩ 識分別と智無分別との関係論証の資料

現代仏教が現代的な夾雑性のもとにあるように、釈尊もその時代の夾雑性にあつて、仏教し仏学せられ、弟子達も仏教し仏学したのである。そして哲学哲学史のように、仏教学仏教学史も発達したわけである。

仏教の基本は覚証のさとりと実践である。そして「覚証の学」は「三学の研学」<sup>sīkṣhā, sīkṣā</sup>の基盤となつてゐるのである。そして「仏 Buddha の立場」を自からの立場として努力した菩薩 Bodhisattva 達によつて、菩提心 Bodhicitta と abhisambuddha の「覚証菩提の学」へと超上されて行つたのである。菩薩とは純粹にこのような「覚証の学徒」となるうと願求し、念願した人々である。大乘菩薩の八千頌般若 Aṣṭasahasrika-Prajñāpāramitā-sūtra にあつては「菩薩はいかにして般若波羅蜜に安住し、いかにして学び、いかにして相応するかに全身全霊を捧げたわけである。

“tat katham bodhisattvena mahāsattvena prajñāpāramitāyān śhātavyam katham sīkṣitavyam katham yogam āpattavyam”

(1) (Bibliotheca Indica, Calcutta, 1888, p. 33, ll. 14-15. Sa-

Kravaria II) (2) (Urai Wogihara (ed.), *Abhisamayālamkāra-śāloka Prajñāpāramitāvyākhyā* by Haribhadra, pt. I, Tokyo: Toyo Bunko, 1932-35, p. 130, ll. 24-25) (3) (P. L. Vaidya (ed.), *Aśtaśāstrika-prajñāpāramitā*, Buddhist Sanskrit Text No. 4: Darbhanga, Mithilā Institute, 1960, p. 17, ll. 11-12) このブライヤの出版については、今回、高崎直道博士と前田孝学博士の好意ある教示による。

この八千頌般若に相当する漢訳は、道行般若の難問品、大度経の天帝积品、摩訶般若鈔経の問品、摩訶般若波羅蜜経の积提桓因品、大般若波羅蜜多経帝积品、仏説仏母出生三法藏般若波羅蜜多経帝积天主品である。このうち玄奘訳の大般若では「云、何菩薩摩訶薩、住般若波羅蜜多、云、何菩薩摩訶薩、云、何菩薩摩訶薩」としている。八千頌般若では、「kathanam」が三つあるのに、ただ云何応住と云何応学の二つとしている。しかるに施護訳仏母出生三法藏般若波羅蜜多経では、令諸菩薩、云、何安住、云、何修学、云、何相応として、八千頌梵本のように kathanam を三つとも訳出している。玄奘訳は第三の kathanam śhātavyam を落して二つにしているのであるが、道行・鈔経・羅什訳はそれどころでなく、この論文では一番重要な「kathanam śhīkṣavyam」「云何修学」さえ脱落し、ただ「云何住」kathanam śhātavyam だけになっている。

尚ハイデルベルヒの Max Walleser 博士は、八千頌の抄訳

を「*Prajñāpāramitā: Die Vollkommenheit der Erkenntnis*」Göttingen, 1914. 出版している。その中の55頁に  
 “Wie soll nun ein Bodhisattva Mahasattva in der Vollkommenheit der Erkenntnis verharren, wie soll er sich darin untermichten, wie soll er sich darin Beschaulichkeit hingeben?”  
 として三つとも訳出している。

② 善財童子「云何学菩薩行」

華嚴経には「覚証菩提の精神」が洋溢している。就中、光明覚品第五・明難品第六・十地品第二十一・宝王如来性起品第三十二・離世間品第三十三・入法界品第三十四の諸品である。そして「般若の智慧学」が華嚴では十地の行や入法界行のように「行学」となっているのが、その特徴である。

十地経では十波羅蜜の菩薩行 bodhisattvacarya であり、入法界品では善財 Sudhana の菩薩十大行であるが、今は「六十華嚴卷第五十九、入法界品第三十四」(卷第四十六、二八頁)に左大正九、六六九中)によつて示す。しかし覚賢訳の六十華嚴では「九大行」となっているため、梵文の十二行と唐訳八十華嚴の十一行と四十華嚴の十三行とを対照し、第二善知識の功德雲比丘 Meghasari の場面に「云何菩薩学菩薩行」とあるものを参照しながら、次のように①「云何学菩薩行」を補充した。

- 問菩薩行 ① 云何学菩薩行 ② 云何修習菩薩道 ③ 云何満足菩薩行 ④ 云何清浄菩薩行 ⑤ 云何究竟菩薩行 ⑥ 云何出生

菩薩行 ① 云何正念菩薩道 ② 云何緣於菩薩境界道 ③ 云何增廣菩薩道 ④ 云何菩薩具普賢行。

“Sudhana āha yādāryavistarena ① katham bodhisattvena bodhisattvacaryāyām *śikṣitavyam* ② katham pratipattavyam (See p. 155 prayoktavyam) ③ katham bodhisattvene bodhisattvacaryā prārabdhā (K. -bdyā) ④ katham bodhisattvena caryāyām caritavyam ⑤ katham bodhisattvena bodhisattvacaryāparipūṛyaviyāyā / ⑥ katham bodhisattvena bodhisattvacaryā parisodhayaityayā / ⑦ katham bodhisattvena bodhisattvacaryāvatartavyā // ⑧ katham bodhisattvena bodhisattvacaryā abhinhartavyā / ⑨ katham bodhisattvena bodhisattvacaryānusartavyā // ⑩ katham bodhisattvasya paripūṛṇam bhavati samantabhadracaryāṃṇḍalam //”

(Gaṇḍavyūha, revised by Hokei Izumi, pp. 151-152)

唐訳八十華嚴卷六十二入法界品第三十九の三六五十一、九頁上

「善財白言、唯願聖者、広為我說、菩薩 ① 応云、何学、菩薩行、 ② 応云何修菩薩行 ③ 応云何趣菩薩行 ④ 応云何行菩薩行 ⑤ 応云何淨菩薩行 ⑥ 応云何入菩薩行 ⑦ 応云何成就菩薩行 ⑧ 応云何隨順菩薩行 ⑨ 応云何憶念菩薩行 ⑩ 応云何増広菩薩行 ⑪ 応云何令普賢行速得円満。」  
四十華嚴卷四入不思議解脱境界普賢行願品第四六五十一、七九頁上  
「善財自言、聖者唯願慈悲、広為我說、我 ① 応云、何学、菩薩行、 ② 応云、何修菩薩行 ③ 応云何起菩薩行 ④ 応云何行菩薩行、

仏教学の基本構造(宮本)

菩薩行 ⑤ 応云何満菩薩行 ⑥ 応云何淨菩薩行 ⑦ 応云何転菩薩行 ⑧ 応云何深入菩薩行 ⑨ 応云何出生菩薩行 ⑩ 応云何觀察菩薩行 ⑪ 応云何増広菩薩行 ⑫ 応云何成就菩薩行 ⑬ 応云何令普賢行速得円満。」

このように善財童子の十大行の根本は発菩提心であり、それによる問求・行学であるから、五十三善知識訪問は善手踏地すべてが入法界の菩提分法となつたのである。東大寺所蔵の国宝「華嚴五十五所絵巻」またの名「善財童子絵巻」がいかに芸術的にこれを語っている。ことに第五十二善知識、弥勒 Maitreya 菩薩の百十七積、百二の譬喩による菩提心讚仰の詩は、自由清新にして、しかも堅忍不拔な善財菩薩行学の体験が反映して、実に美事である。

爾時弥勒菩薩告善財言、善哉善哉、童子、乃能発阿耨多羅三藐三菩提心、専求一切佛法、饒益一切世間、救護一切衆生、善男子、汝得善利人寿命命、值遇諸仏、得見文殊師利大善知識、汝為法器、善根潤沢、長清白法、淨勝欲性、為善知識之所總攝、諸仏護念。何以故、菩提心者則為一切諸仏種子、能生一切諸仏法故。菩提心者則為良田、長養衆生白淨法故。菩提心者則為大地、能持一切諸世間故。

以下さらに菩提心は淨水・大風・盛火・淨日・明月・淨燈・淨眼・大道・正濟・大乘・門戸・宮殿等にわたる百十七積、および「譬如有人得自在菓」以下百二の譬喩に伺われる

通りである。

たまたま弥勒 Maitreya の五論のうちには数えられている『大乘莊嚴經論』Mahāvāna-sūtrāṅkara は、実は無着 Asaṅga の著といわれているが、その第二十一品は「覺分品」であつて、梵本では第十八品 *Bodhipaksadhikāra* に当る。このうちに四念処・四正勤・五根・五力・七覺支・八聖道分の三十七覺支が説かれてはいるばかりでなく、四依や四法印など、大小乗ともに通ずる教説を包擁しながら、覺証菩提の大乗精神に溢れているわけは、華嚴經全体に洋溢している覺証精神の基盤に立つものであるからであらう。

さらに三十七覺支または菩提分法は、声聞 *śrāvaka* の行法であるとともに、それがそのまま菩薩の十波羅蜜行に総合攝取せられているところに、「大乘の立場」が光っているのである。したがつて大乘菩薩の学は「悉学一切善法一切道」といわれ大きく広いのである。大品般若經が通三乗の立場といわれるが、華嚴十地經もこれに同調するものであつて、大まかで窮まるころがない。そこで初めの九地は「応学而不取証」であるが、第十の仏地だけが「亦学亦証」とさえいわれる。この「学、ひかつ証し、分別し、弁別しながら、証悟する」立場こそ、仏教学の基本構造の一線上にあるものといえよう。

前述した『大乘莊嚴經論』の述求品 *Dharma-pariṣeṣy-adhikāra* 第十二の「求真実義」*Dharma-tattva-pariṣeṣi* 「求

真実譬喻」*Tattva-māyopama-pariṣeṣi* に詳しく三性・内外・迷悟・有無・空有によつて、無二(不二)の中道義が説かれてさえている。この「求」*pariṣeṣi* は、前述した法華經の分別功德品第十六と漸備一切智德經(十地經)の興光住品第三に説かれてはいる「求法」の求 *pariṣeṣi* と同じく、仏教学の萌芽「善を求めて」「法を求めて」や「聖求・求善」とともに、仏教学の基本線上にあるものである。

さらに大乘莊嚴經論真実品 *Tattva-adhikāra* 第七では、有無・一異・生滅・淨不淨・増減の「五種の無二相」によつて第一義相 *paramārtha-lakṣaṇa* 説かれつゝ、

na samna ca asanna tathā na ca anyathā na jāyate vyeṭi na  
ca avahyate /  
na vardhate na api viśūdhvate punar viśūdhvate tat paramā-  
rtha-lakṣaṇam // 1 //

有ならず亦非有ならず。同ならず亦異ならず。生せず滅せず。損減せず、

増益せず。淨ならず而もまた淨なり。これ即ち第一義の相なり。

この無着の大莊嚴經論の五種無二相の中道義は、竜樹の中論における不生不滅・不去不來・不一不異・不斷不常の八不中道義ほど一般的に知られていない。中論では諸法実相 *dharma-tattva* とつゝ、華嚴では法界 *dharma-dhātu* とつゝ、共に真実相 *tattva-lakṣaṇa* を語つてゐるのである。



の人々によき法を説いて、さとり導けと、激励されたのである。この「仏陀の伝道宣言」ほど、仏者に勇気をおこさせる言葉はないであろう。筆者は、釈尊の解脱 mokṣa, freedom, liberty, deliverance と涅槃 peace を生かしつゝ、仏陀の伝道宣言を、次のように頂いてゐる。

世のため人のため、大衆の利益幸福のため、世界人類の自由と平和のために、よき法を説いて、一人でも多くの人々をさとり導け。

次に書き残した七大綱要と、第四章以下、第十一章までの目次を次に掲げたい。

四 仏陀の伝道宣言をスローガンに採り入れて新しい伝道文学を創作した法華経の大衆性

五 仏教生活の実践的総括

①聞思修の三慧 ②六度十波羅蜜 ③四摂事、布施・愛語・利行・同事 ④三聚淨戒、摂律儀戒・饒益有情戒・摂善法戒

六 仏教発達の学的構造

①アビダル研究仏教 ②中観仏教 ③通三乗、瑜伽唯識の中道教 ④禪・念仏・唱題・密教の骨目

七 四諦・二諦・三諦・一諦・無諦

八 空観・法界縁起・中道の連系発達

九 中国仏教と日本仏教

十 アジアの仏教、世界の仏教

十一 仏教学六十五年(大正二年—昭和五十一年)

前掲「仏陀のさとり体験と中道の原型—苦楽の中道と八正道中道—」についで、「仏最陀初説法と中道の原型」(智山学报第11・12輯、昭和39年11月、一九五六、1—10頁)、「The Buddha's First Sermon and the Original Patterns of the Middle Way」(Journal of Indian and Buddhist Studies, vol. XIII, No. 2, March 1965, pp. 845-855)

「仏陀最初説法について」(仏誕二千五百年記念会刊『仏教学の諸問題』岩波書店、三二五—三四四頁)

「“The Middle Way from the Standpoint of the Dharma”

(JIB, vol. XVII, No. 2, March 1969, pp. 932-963)がある。

また「仏陀の伝道宣言」については、金倉円照編『法華経の成立と展開』(昭和45年3月、平樂寺書店、三一七—三三二頁)がある。右の十一章のうち、一・二を除いて、殆んどの項目についてこれまでに発表論文または下書きはあるのであるから、是非、機を見て、この「仏教学の基本構造」の論文をまとめたいと志している。

仏教学六十五年(大正二年—昭和五十一年)

ここに六十五年というのは、大正二年に基礎医学<sup>メデシナ</sup>二年を修めた大正二年春、医学をやめて仏学に転じ、今日に至つた期間である。多田鼎先生の講席に列つて「清沢満之の文」に親しむことができたのが、基因となつた。

東大では、明治二十六年九月、諸学科とともに「印度哲学

科が設けられたが、講座のない科であった。「印度哲学講座」が創設されたのは、大正六年九月十一日であった。村上專精講師の懇請に答えて、安田善次郎翁が寄附したもので「安田寄附講座」といわれてきた。寄附目的は、次の通りである。

仏教哲学奨学資金

「印度哲学、殊に仏教哲学研究の為」印度哲学講座開設費

ついで大正八年、釈宗演記念奨学資金「印度哲学講座増設の資途」として、釈宗活釈敬俊より寄附。大正十年十一月二十二日設定。

さらに、大正十五年七月一日、岡田良平文部大臣によつて「官設講座」が設定された。これが「印度哲学及印度に於ける仏教の研究」と規定付けし第一講座とした。それで「仏教哲学研究の為」として寄附された安田寄附講座を第二講座とし、釈寄附講座を第三とした。岡田良平・沢柳政太郎のお二人は、清沢満之を兄貴分とした大の親友仲間であった。京都大学に設定された官設「仏教哲学講座」のように、東大にも官設「仏教哲学講座」が意図されたものと思われる。

東大には印度哲学講座第一・第二・第三が設定されているが、ついに「仏教哲学講座」がないことになり、仏教哲学研究が世界的に興隆してきた今日、まことに遺憾なことである。印度哲学講座の三ついずれも仏教哲学・禅学・仏教哲学のための寄附行為であつて、印度哲学のためのものはなかつた。

筆者が「仏教哲学」を提唱したのは、①昭和五年五月で、処女作「根本中の研究、根本中の立場と阿毘達磨の本義」の一節「根本中の立場と仏教哲学」(筆者)が最初であつて『宗教学論集』(宗教学講座二十五年記念)へ寄稿したものである。

②同じく昭和五年六月「仏教哲学の組織と根本仏教」(『日本の宗教学』)。③昭和七年「専門学としての仏教哲学」(『宗教学紀要』)④「仏教哲学と根本仏教」(博士)還暦記念「仏教論叢」(昭和八年弘文)⑤「識・智・覚証の弁証法的展開と仏教哲学」(同上)などである。なお昭和九年「仏誕二千五百年記念に刊行された『仏教哲学の諸問題』(昭和十年岩波書店)は「仏教哲学」を公唱した最初の出版かと思う。筆者は「仏陀最初説法について」の一文を寄稿した。サルナート鹿野苑における『初転法輪経』についての研究であつたので、野生司香雪画伯が色紙の中央に法輪(ダルヤク)と鹿を描いて香雪と署名し、右上段に高楠順次郎先生が「遮伽羅羅」と書き、宇井伯寿先生が「微笑 伯寿」と署名し、記念に頂いた。画面縹渺として、初転法輪このかた、円環無限なるみ仏の行証伝わりて、今ここにあるあかしでもあつて、尊い限りである。

昭和二十六年十月十五日「日本印度学仏教学会」創立を始めとし、記すべき事柄は多いが、この度はこれで擱筆する。